

映像の連続性知覚に関する研究

著者	奥野 真之
学位授与年月日	2015-01-16
URL	http://doi.org/10.15083/00007926

審査の結果の要旨

氏 名： 奥野 真之

映画では編集箇所はあまり意識されず、観客は事象（event 出来事）の流れを知覚する。ショットを繋ぎ、事象の開始から終了までの途切れない時系列を構成する技術は「コンティニューイティ編集」とよばれる。本論文はこの技術を可能にする知覚心理学的背景を、「カットを見逃す現象」（実験 1）と、「アクション編集で事象の持続を知覚させる条件」（実験 2）についての実験から検討している。

2章は、ショット、トランジション、カットなどの主要用語を定義し、コンティニューイティ編集の具体的技法（マッチング・アクション、180°ルール、アイライン・マッチ）を紹介し、その働きについての先行研究を概観している。また研究の背景にある映像知覚理論（構成主義、生態心理学、折衷主義）を展望している。コンティニューイティ編集は、映画製作史初期から、製作現場の経験知として開発、蓄積、伝承されているが、知覚的なメカニズムについては十分な研究が行われてこなかったとしている。しかし、近年、一部の技法の機能に実験的にアプローチする研究が増加する傾向が見られ、本論文はそれと軌を一にする試みであるとしている。

3章は、まず事象を部分ユニットから編集し、事象の流れを提示する分節課題法によるこれまでの映像知覚研究が、事象のレベルが、ショットの順序などの下位の要素的レベルには還元できない自律した独自の構造として成立しており、映像知覚が、事象に固有な構造の制約下で成立する可能性を示しているとしている。さらに事象を基礎的実在であるとしたギブソン生態学的知覚理論や、同時代のミショットの因果知覚研究なども参照し、映像知覚では事象が検討すべき単位であるだろうとしている。

4章は、映像視聴時にカットを見落とす現象の実験を行なっている。カット区切れ目の検知課題を用い、カットの存在に気づかない「カット見落とし現象」が生ずる条件を、事象のユニット構造との関連で検討している。成人参加者（32名）には、「東京物語」（小津安二郎監督）、「用心棒」（黒澤明監督）、「殺しの烙印」（鈴木清順監督）など6本の邦画から抽出した5分間の映像を提示して、カット出現の検知を手元のボタン押しで回答することを求めている。カットごとの検知率を元に、一般化線形混合モデルに

よるロジスティック回帰分析を行ない説明変数のモデルを選択している。分析結果から、カットが事象の境目（本実験とは異なる20名の予備実験参加者が「特定の出来事が終わり、他の出来事が始まった」と判断した箇所）の付近に位置しているときにはカット検知率が上がること、カット前後のショット間において背景場面が連続する場合は検知率が下がること、また画面の輝度変化がカットの前後でプラスに（明るく）なるほど検知率が上がる傾向などが示された。一方、アクションのカット前後での一致や、映画の「作品スタイル」（コンティニューイティ編集に従っているかどうか、例えば「用心棒」は従っているが「東京物語」はそうではない）には確実な効果が見られず、またこれらの変数の交互作用にも効果が見られず、モデルから排除されたとしている。

5章は、コンティニューイティ編集の代表的技術である「マッチング・アクション法」（同じアクションでショット連続性を構成する方法）で実験者が編集した映像材料を用い、知覚的連続の印象を検討している。先行ショットで一旦中断されたアクションを、後続ショットのどの時間軸上の位置（直結、省略、重複）で開始した場合により連続的な印象を与えるのかについて、2つのカメラ・アングルから撮影した3つの事象（ボールの転回、風船の落下、茶を注ぐ）を、事象の序盤・中盤・終盤で編集した映像素材で検討している。参加者（32名）に一対比較法で判断を求めた二値データを元に尺度構成を行なった（さらに補足的に宇佐美（2009）のモデルに基づいて分析した）結果、カットを連続させる詳細な技法による普遍的な連続性判断の偏向性は確認されなかったが、後続ショットの開始位置が映像の連続性評価に及ぼす効果が提示した事象ごとに異なることは示唆されたとしている。

6章「総合考察」は、二つの実験結果を総合して、事象のマクロな水準が、それを構成する下位のミクロなカットの水準よりも、編集された映像の知覚の種々の局面で効果を示す可能性があり、事象に固有な構造を映像知覚の制約条件としてさらに検討する必要性があるとしている。

7章「まとめと今後の課題」は、本論文が扱った2ショット間を越える長いシークエンスや、音声などの付加要因をさらに検討して、製作現場に研究成果を還元する必要性が指摘されている。

審査会は、知覚研究と映画製作を関連させる学際的な観点の議論が足りないこと、実験で使用された映画が限られていること、日常的な事象知覚と

映像のそれを関連させる理論についての検討が十分ではないこと、構成主義的注意理論と、生態心理学の不変項理論の関連についての議論が不十分であることなど、本論文には今後、検討すべき内容が残されていることを指摘しつつも、本論文が動画表現の存在を可能にしている情報の解明に、二つの実験と、それらの結果のきわめて詳細な分析から確実な基礎的知見を提示していることを高く評価した。さらに得られた結果の範囲内で、凝集性のある論を構築していることが評価できる点でも一致した。よって、本審査会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断した。